学術資料講演会要旨

フォックスウェル文書に見る世界的な知の交流
－経済学を中心に－

経済学部教授　井上　琢智

関西学院創立125周年を前に「新基本構想」(2009-18)が策定された。「フォックスウェル文書」は、そこで掲げられた関西学院のミッションとスクールモットーを実現するためのヴィジョンの一つ「『関学らしい研究』で世界の拠点となる」を実現するために購入された。「フォックスウェル文書」は、19世紀後半から20世紀初頭のイギリスを中心とする「世界的な知の交流」を明らかにする世界的財産の一つであるといえる。

【Ⅰ】フォックスウェル(Herbert Somerton Foxwell,1849-1936)

1）略歴

フォックスウェルは、1849年6月17日、ブリストル南のシェプトン・マレット(Shepton Mallet)に生まれ、ウェスレー派のメソヂスト教徒として育てられた。後に東京帝国大学で経済学の講師となるアーネスト・フォックスウェル(Ernest Foxwell, 1851-1922)は彼の弟である。1867年、フォックスウェルは18歳でロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジでB.A.を取得した。

当時、近代化を迎えつつあった日本は、模範国イギリスの文物を導入しようと多くの留学生をイギリスに送った。彼らは、イギリス国教会の高等教育機関であるオックスブリッジではなく、イギリスの中産階級にリベラル・アーツを授けるために創立されたユニヴァーシティ・カレッジやキングス・カレッジを擁するロンドン大学に留学した。例えば、フォックスウェルが在学していた頃の1866-67年度[1]のユニヴァーシティ・カレッジには井上勝、鮫島尚信、吉田清成らが、少し遅れて1879-80年度には末松謙澄らが、さらに1884-85年度には添田寿一らが留学し、マンチェスターのオウエンズ・カレッジには、1876-77年度に杉浦重剛が、少し遅れて1878-81年度には平賀義美が、1879-80年度には高松豊吉らが留学した(井上琢智『黎明期日本の経済思想 ― イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化』2006)。

フォックスウェルは1868年にケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジに道徳学を学ぶ学生として入学、1870年にはマーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の経済学講義に出席、道徳学のトライポスに合格している。その後ヒューエル奨学生に選ばれ、また、後にマーシャル夫人(1877年結婚)となったメアリー・ペイリー(Mary Paley, 1850-1944)にデカルトやロックを指導した。そして1874年になりセント・ジョーンズ・カレッジのフェローに選出された(1874-89: 1905-36)。この年、ジェヴォンズ(William Stanley Jevons, 1835-1882)(当時39歳)とともに「異常な若さ」(当時25歳)のフォックスウェルは、ケンブリッジ道徳学のトライポス用の経済学の試験官に就任したが、これが二人の交流の契機となった。この交流を通じてビブリオ・グラファーであるジェヴォンズの古書収集の「趣味」に感染した。1875年には、セント・ジョーンズ・カレッジの道徳学講師に任命された。ジェヴォンズは1876年、ユニヴァーシティ・カレッジ教授に転出することになったが、オウエンズ・カレッジでの残りの授業をする必要があり、その間、フォックスウェルがユニヴァーシティ・カレッジのジェヴォンズの授業を代行した。1877年、結婚のためにマーシャルがケンブリッジを去ったために、彼に代わり、フォックスウェルがシジウィック(Henry Sidgwick, 1838-1900)、ケインズ(John Neville Keynes, 1852-1949)と協力して、トライポス用の経済学の責任者となった。

弟のアーネストは医学を学んだ後、1874年ケンブリッジ大学で道徳学トライポスに合格し、1880年にはケンブリッジでM.A.を取得した。

フォックスウェルは、1882年に経済学クラブ会員(-1936)に選出された。著作業に専念するために退職したジェヴォンズの後任として、その前年の5月7日にユニヴァーシ

1）1866年秋学期より約1年間の滞在である。以下同様。

ティ・カレッジ教授に就任（-1927）し、同時に、統計学のニューマーチ講座の職にも就いていた。1882 年 8 月 13 日にジェヴォンズが死去し、彼の論文集『通貨および金融の研究』*Investigations in Currency and Finance* の編集を担うこととなり、また、彼の『経済学原理』*The Principles of Economics* を編集開始した。フォックスウェルは前者が 1884 年に出版された際に序文を書いたが、後者の編集はヒッグス（Henry Higgs, 1864-1940）により完成され 1905 年に出版された。1896-99 年の間、弟アーネストは東京帝国大学などで経済学を講義した。また、フォックスウェルは 1898 年にメイ（Olive May）と結婚している。当時フォックスウェルは 50 歳であった。

1908 年、マーシャルがケンブリッジを退職する際、フォックスウェルは後継者となることを望んだが、マーシャルの愛弟子ピグー（Arthur Cecil Pigou, 1877-1959）が後継者となった。さらに、1922 年になるとフォックスウェルは 40 年間奉職したユニヴァーシティ・カレッジの教授職を辞任し、1929 年に王立経済学会会長に就任した。会長の地位には 1931 年まで就いていた。その間の 1930 年妻メイが死去し、1936 年になってフォックスウェルもまたその生涯を終えた。

2）業績

1886 年：“The Social Aspect of Banking” *Journal*, 1886, 2 月号

1888 年：“Certain Misconceptions in Regard to the Bimetallic Policy of the Fixed Ratio”

“The Growth of Monopoly and its Bearing on the Function of the State”

1892 年：“Mr.Goschen's Currency Proposals” *Economic Journal*（以下 *EJ*）, 3 月号

“The International Monetary Conference” *Contemporary Review*, 12 月号

1893 年：“Bimetallism, its Meaning and Aims” *Economic Review*, 6 月号

1895 年：“A Criticism of Lord Farrer on the Monetary Standard” *National Review*, 1 月号

“The Monetary Situation” ナショナル・リベラル・クラブでの講演

“Shaw' s *History of Currency*,” *English Historical Review*, 10 月号

1907 年：“A Letter of Malthus to Ricardo” *EJ*, 6 月号

1908 年：“The Goldsmith's Company's Library of Economic Literature”（*Palgrave's Dictionary of Political Economy* の「経済学文庫」）

1909 年：“The Banking Reserve” *The Secretary*, 3 月号

“The American Crisis of 1907” *The Secretary*, 4 月号

Andréadès の *History of the Bank of England* の英訳への序文

1910 年：W.R. Bisschop の *The Rise of The London Money Market* への序文

1913 年：J.M.Keynes の *Indian Currency and Finance*, 書評 , *EJ*, 12 月号

1914 年：H.Withers の *Money-Changing*, 書評 , *EJ*, 6 月号

G.H.Pownall の *English Banking* への序文

1915 年：W. R. Lawson の *British War Finance*, 書評 , *EJ*, 12 月号

1916 年：“Ways and Means” *EJ*, 3 月号

1917 年：“The Nature of the Industrial Struggle” *EJ*, 9 月号

“The Financing of Industry and Trade” *EJ*, 12 月号

“Inflation：In what sense it exists; How far it can be controlled” *Journal of Institute of Actuaries*, 10 月号

1919 年：“Obituary Archdeacon Cunningham” *EJ*, 9 月号

Papers on Current Finance（論文集）

1922 年：“The Pound Sterling” *The Accountant*, 11 月 21 日号

1927 年：P. W. Matthews の “A History of Barclays Bank” 書評 , *EJ*, 9 月号

H.S.Foxwell

【Ⅱ】R.D. フリーマン文書について

1）フリーマン（Richard Downing Freeman, 1936-）について

メルボルン大学でタッカー（Graham Tucker, 1924-）のもとで経済思想史を学んだフリーマンは1959年同校を卒業、1963年から1970年にメルボルン大学で経済史などを担当し、1970年からは、オーストラリアの経済発展委員会のアドバイザーなどを務めた。1971年にはイギリス大蔵省のアドバイザーとなるなど、その後官界に転じ活躍した。彼は、イギリスの哲学者で経済学者であったシジウィック研究の過程で、フォックスウェルに関心を抱くようになった。

2）フォックスウェル文書発見の経緯

欧米における経済学史研究に棹さしたのは、1972年にイタリアのベラジオで開催された限界革命百周年記念の国際会議とマンチェスターで開催された経済思想史学会であった。当時の世界の経済学史研究のリーダーであったブラック（R.D.C.Black, 1922-2008）、コーツ（A.W.Coats, 1924-2007）[2]らは、経済学史研究における手書き文書・書簡の重要性について共通認識を持つにいたった。特にジェヴォンズ文書・書簡を編集していたブラックは、自らもビブリオ・グラファーとして業績をあげ、フォックスウェル書籍蒐集に大きな影響を与え、交流があったジェヴォンズとフォックスウェル間の書簡の発見に努めていた。また、王立経済学会の創設に関心をもっていたコーツも、フォックスウェルとマーシャルとの、フォックスウェルと争ってマーシャルの後継者となったピグーとの確執を調査していた。彼らはフォックスウェルの長女オードリーに手紙を送ったが、書簡はもちろんフォックスウェルの手稿等もないとの返事であった。

フリーマンはまた、古典派経済学者D.リカード全集[3]の編集者で自らも著名な経済学者であったスラッファ（Piero Sraffa, 1898-1983）らもまたフォックスウェル文書を探索したものの、失敗に終わったことを知った。

1973年、長女オードリーの他界を知り、出版社マクミランの協力を得て、フリーマンはフォックスウェルの次女メタム夫人（Mrs. Peggy Mettam）と接触する機会に恵まれ、ケンブリッジのハーヴェイ通りにある邸宅のフォックスウェル文書の調査の許可を得た。訪れた邸宅には、書籍の他、入口脇の踊り場・屋根裏部屋・未使用の浴室の浴槽と戸棚には厚紙製の箱・ゴミ箱など170以上の箱があり、そこには世界的に著名な経済学者エッジワース（Francis Ysidro Edgeworth, 1845-1926）、マーシャル、ケインズ親子からの手紙、歴史的に重要な多くの手紙や、カード化されていない文書、フォックスウェル文庫（後のゴールドスミス文庫）に含まれる図書の蒐集領収書などが詰まっていた。それらの箱の埃の状況から見ても明らかに1936年のフォックスウェルの死後一度も触れられていないものであった。

そこで、フリーマンは、ロンドンの3大オークショナーのひとつであるPhillip Son & Nealeをメタム夫人に紹介した。発見された書簡・文書類以外の稀覯書は、1974年のオークションで£7,000、家具などは£20,000で落札された。この協力による感謝として、フォックスウェル文書はフリーマンに寄贈された。もし、フリーマンがオードリーの死後連絡を取っていなかったとしたら、裏庭で焼却されたであろう。

3）フォックスウェル文庫・文書の行方

蒐集癖のあったフォックスウェルの文庫・文書は、彼の生前に手放したものを含めて、現在までにどのように世界に散らばって所蔵されているのであろうか。

a）フォックスウェル文庫

①ゴールドスミス文庫

現在、ロンドン大学のSenate House Libraryに所蔵されている。この文庫は、フォックスウェルが蒐集した約3万冊の経済学古書のコレクションで、生前ロンドン大学へ寄贈するために、1901年にゴールドスミス商会によって買い取られ、1903年に寄贈された。

②クレス文庫

現在、ハーヴァード大学のBaker Libraryに所蔵されている。この文庫は、ゴールドスミス文庫との重複本とフォックスウェルがその後蒐集した約3万冊の経済学古典書のコレクションである。このコレクションをアメリカの実業家C.W.Kressが購入し、ハーヴァード大学に寄贈した。

③その他

a）Phillip Son & Nealeにより競売（1974）にか

2）ブラックは1980年に、コーツは1984年に、堀経夫学長以降日本の経済学史研究の研究拠点の一つであった本学を訪問している。
3）堀経夫名誉教授はこの全集の邦訳の監訳者であり、スラッファの堀宛書簡は関西学院史編纂室が所蔵している。他の堀名誉教授の書簡・手稿の整理は最終段階に入っている。

けられたもので、稀覯書類として Andrea Palladio, *The Four Books of Architecture* (1715)、Charles Darwin, *On the Origin of Species by means of Natural Selection* (1st ed.,1859) などが含まれていた。購入先は不明である。

b) フォックスウェル文書①

クレス文庫に含まれる図書の蒐集に関わる古書業者や大学図書館との書簡類、古書目録や古書に関わる切り抜き、約 500 点であり、クレス文庫の所蔵図書館であるハーヴァード大学の Baker Library に、フォックスウェル自身によって寄贈されたものである。経済学者らからの書簡は含まれていない。

c) フォックスウェル文書②

フォックスウェルの遺品処分の協力のお礼として、長女オードリーの没後、次女のメタム夫人からフリーマンへ寄贈されたもの。

フォックスウェル文書② -1

ゴールドスミス文庫に含まれる図書の蒐集に関わる古書業者や大学図書館との書簡類であり、古書目録や古書に関わる切り抜きなど 86 箱である。これらは 1880 年から 1936 年の間にフォックスウェルが蒐集した書籍に関する資料であり、ゴールドスミス文庫の所蔵図書館であるロンドン大学の Senate House Library に、1974 年にフリーマンによって寄贈されたものである。これらの文献情報のコレクションは、ヒッグス著 *Bibliography of Economics, 1751-1775*, (Cambridge University Press, 1935) の中心をなしたものである。経済学者らからの書簡は含まれていない。

フォックスウェル文書② -2

関西学院大学が購入した文書 (「RDFC」と略称し、以下 [Ⅲ] で詳細を示す)。

【Ⅲ】R.D. フリーマン文書 (RDFC) の内容について

1) 内容

a) 新聞記事の切り抜き・議事録・手稿・ノート類

①複本位制、金融・財政、政治、社会主義、ボルシェビキ思想、労働運動、協同組合などの話題に関する新聞記事の切り抜き。フォックスウェルの蒐集癖を反映して切抜きの大部分は紙に貼られ、娘オードリーによる書き込みが見られる。ここにも数多くの書籍目録、その切抜き、書籍のちらし、書誌学的関心に関わる資料が含まれている。

②印刷媒体の議事録、覚書

王立経済学会、イギリス学士院、ロンドン大学図書館委員会、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス (以下 LSE) などのサーキュラー、印刷媒体の議事録、覚書が含まれている。

③手稿・ノート類

大多数のフォックスウェルの広範な話題の手書きのノート類がある。また、講義ノートの内容は、社会主義、労働運動に関するものが見られる。金融・財政問題に関するものは、経営問題、特に競争や貿易と同じように数多く含まれている。また、期待に違わず、複本位制に関する数多くのノートが含まれている。これら①②③は、フリーマンがロンドン大学の Senate House Library に寄贈した文書 (フォックスウェル文書② -1) と類似した内容である。

b) 書簡類

① ロンドン大学図書館所蔵文書 (フォックスウェル文書② -1) と異なっているのは、数多くの個人書簡が含まれていることである。それらの手紙は、15 歳から 1936 年に他界するまで、フォックスウェルの生涯のうち 70 年をカバーしている。

ア) 約 80%がフォックスウェル宛書簡である (以下②③④を参照のこと)。

イ) 約 20%がフォックスウェルによって書かれた書簡 (下書き) である。

ウ) その他

長女オードリーに宛てた書簡でフォックスウェルに関連した書簡であり、彼の死後 1936 年以降のものも含まれている。

②フォックスウェル宛書簡の差出人 (1)

フォックスウェルは、同時代のイギリスの経済学者だけでなく、政治家、ジャーナリスト、哲学者とも交流を深め、その交流の軌跡を示す書簡類をその「蒐集癖」

ゆえに残した。

本書簡のコレクションに含まれる書簡の差出人の数は、およそ 4,500 人（組織も一人と数える。経済学者からの書簡は約 3,000 通である）に及ぶ。その中から経済学者を中心に著名な人物（他に政治家やジャーナリスト、ケンブリッジ大学の教員、大学、学会）を具体的に以下に示す（括弧内の西暦横の数字は、書簡の数である＜未確定＞）。

マルサス研究家の J.Bonar（1852-1941：175）、LSE の E.Cannan（1861-1935:41）、ユニヴァーシティ・カレッジの前任者 W.S.Jevons（1835-1882：50）、ケンブリッジの同僚でもあった A.Marshall（1842-1924：237）、J.N. Keynes（1852-1949：101）、その息子 J.M.Keynes（1883-1946：76）などの経済学者だけでなく、統計学者 A.L.Bowley（1869-1957：21 ＜本図書館は Bowley 親子のコレクションを所蔵している＞）、倫理学者で経済学者でもあった H.Sidgwick（1838-1900:46）、また、彼の対抗馬であった A.C.Pigou（1877-1959：12）、さらにオックスフォードの数理経済学者で統計家であった F.Y.Edgeworth（1845-1926：335）などである。

また、哲学者 J.Venn（1834-1923：20）、政治家としては W.E. Gladstone（1809-98:1）、H.Higgs（1865-1940:641）、H.McNeil（1907-55：389）などである。

③フォックスウェル宛書簡の差出人（2）

経済学の制度化と世界的普及の時代に生きたフォックスウェルは、イギリス国内だけでなく、諸外国の経済学者との交流を深めた。アメリカの経済学者 J.M.Clark（1884-1963:4）、R.T.Ely（1854-1943:1）、E.R.Seligman（1861-1938：42）、さらに統計学者で経済学者でもあった I.Fisher（1867-1947：18）、ドイツの経済学者 E.Böhm-Bawerk（1851-1941：2）や C.Menger（1840-1921：2）、その弟 A.Menger（1841-1906：4：フォックスウェルは彼の著書『全労働収益権史論』の英訳で序文を書いた）、J.A.Schumpeter（1883-1959：2）、フランスの経済学者 L.Walras（1834-1910：23）などと交流をもった（その他の経済学者の事例は以下の資料を参考のこと）。

④フォックスウェル宛書簡の差出人（3）

幕末明治期からイギリスに留学した日本人（それについては、井上琢智前掲書に詳しい）もまた当時世界的にも著名であったフォックスウェルに多くの書簡を送っている。その数は 40 名にも及ぶ。確定出来る日本人氏名を具体的に以下に示す（括弧内の西暦横の数字は、現在確認されている書簡の数である）。

その中には、オックスフォード大学へ留学し、帰国後特命全権公使、貴族院議長を務めた蜂須賀茂韶（モチアキ：1846-1918：1）、ケンブリッジ大学へ留学し、帰国後、法学博士、文学博士、官僚、政治家となった末松謙澄（1855-1920：9）、同じく、ケンブリッジ大学へ留学し、帰国後官僚エコノミストとなり、イギリスの経済雑誌『エコノミック・ジャーナル』*Economic Journal* の日本通信員として多くの日本に関する記事を書き、日本の現状を世界に伝えた添田寿一（1864-1929:18）、同じくさらに、大蔵官僚、貴族院議員として政界で大きな役割を演じた阪谷芳郎（1863-1941：2）らが含まれている。大蔵秘書官や日本銀行監理官として手腕を発揮し、日清戦争後、償金受理事務などとして活躍し、後に中上川彦治郎の後を受けて三井銀行の専務理事となった早川千吉郎（1863-1922:8）などもいる。

その他、人名がほぼ確定し、その経歴等が多少なりとも確認できるのは、以下の日本人である。

桑田熊蔵（社会政策学会設立、労働問題の権威、東京帝国大学教授）、宮島綱男（関西大学教授）、武藤長蔵（長崎高等商業学校教授）、岡部長織（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン留学、外務次官、貴族院議員）、内田銀三（東京帝国大学教授）、渡辺修二郎（ジェヴォンズの著書の邦訳者、大蔵省御用掛等）などである。

2）公開について

これらのフリーマン文書の一部は、現在、“Economist's Papers：preserving economic memory” で公開（www.economistspapers.org.uk）されており、本フリーマン文書が「関西学院大学図書館所蔵」となったことが記されている。

Cf. Donald Winch, “Keynes and the British Academy”, *British Academy Review*, 22, Summer 2013, p.72.

【Ⅳ】R.D. フリーマン文書（RDFC）の資料上の価値

フォックスウェルが生きた時代は、経済学が古典派経済学から現代の経済学の基礎の一つとなった近代経済学が誕生し、経済のグローバル化にともない、経済学もその制度化（経済学の科目としての設置、経済学会の設立、経済雑誌の創刊、経済学部の設置など）を通じて、世界に普及していった時代であった。その経済学の中心が、ケンブリッジであり、その核に位置していたのがマーシャルであり、同僚ネヴィル・ケインズであり、後輩フォックスウェル、マーシャルの弟子メイナード・ケインズらであった。さらに、その経済学の核の周囲を取り巻く経済学は、オックスフォードやLSEの経済学であり、フランス、ドイツ、アメリカの経済学であり、それを継承しようとしたのは、日本など当時の発展途上国においてであった。加えて、フォックスウェルは、経済学者とだけではなく、倫理学者、哲学者、政治家、ジャーナリストと交流し、その範囲もイギリス国内だけでなく海外のそれらの人びとと交流した。

その交流の手段として、同時代でもっとも重要であったのは、書簡であった。この点で、フリーマン文書（RDFC）の中核をなす書簡は、4,000名におよぶ差出人、書簡総数24,000通にもおよぶ（正式な数字は、この文書の完全な整理が終わっていないためにあくまでも概数である）。経済学者からの書簡だけでも約3,000通あり、フォックスウェル家族内の私的書簡も2,300通を越える。

これらの書簡は彼が15歳となった1864年から1936年にいたるまでの期間に書かれたものであり、その期間は、まさにイギリスが「世界の工場」「黄金時代」となった1850年代から、発展途上国の追い上げによって、限界原理に基礎をおく近代経済学が誕生したものの、その相対的地位が低下し、「小さな政府」からしだいに「大きな政府」へと転換し始め、「ゆりかごから墓場まで」で象徴されるような世界で初めての福祉国家の成立へと導いた時代に及んでいる。このような歴史的背景を踏まえると、書簡を中心としたこのフリーマン文書は、以下のような研究上の意義をもつであろう。

第一に、ヴィクトリア時代の著名な経済学者フォックスウェルの伝記的研究のための一次資料として一級であること。

第二に、フォックスウェルの思想・経済学の形成史を明らかにするための一次資料として一級であること。

第三に、イギリスのヴィクトリア時代の知的階級の生活史・家族史研究のための一次資料として一級であること。

第四に、1870年代に誕生し、イギリス国内だけでなく、アメリカ、フランス、ドイツ、そして日本へ普及しつつあったいわゆる近代経済学の普及・定着過程を明らかにするための一次資料として一級であること。

第五に、その近代経済学とは立場を異にする歴史学派や社会政策学派らに属する経済学者との論争を明らかにする一次資料として一級であること。

第六に、経済学の制度化が世界的に進行する中で、フォックスウェルと書簡の相手が、その制度化に如何なる姿勢をとったかを明らかにする一次資料として一級であること。

このような経済思想史・社会思想史的視点からだけでこのフリーマン文書の価値を語ることは、明らかにこの資料群の価値を誤ることになると思われる。

つまり、第七に、フリーマン文書は、その性質から考えて、狭く経済思想史・社会思想史だけでなく、広くケンブリッジ大学を含む知的社会の「知の交流」という知識社会学的視点からも評価すべきであろう。まさに、彼の生きた時代が、“Philosophy” から “Sciences” にと、知的体系が構造的変化を遂げつつあったことを考えると、このフリーマン文書の一次資料としての価値はさらに高い。

第八に、フリーマン文書に含まれる諸資料は、イギリスの政治が旧体制から労働党の誕生を含む新たな政治体制へと変貌してゆくのを跡づけるのに必要な情報を提供するであろう。まさに同時代の政治史・イギリス史の解明に役立つ情報を、とりわけ著名な政治家・官僚との書簡が提供するであろう。例えば、約389通もの書簡をフォックスウェルに送ったマクニール（Hector McNeil, 1907-1955）は、イギリスのジャーナリストであり、後年、労働党下院議員（1941-）、内相（1946-1950）、国連総会副議長（1947）などを務めるが、若きころのマクニールとフォックスウェルとの交流は興味深い。

第九に、このようにさまざまな特徴をもつフリーマン文書の研究は、まさに「学際的」研究を通じてしか実現できないものであり、関西学院大学内の共同研究の対象となるべ

き一次資料である。

第十に、フリーマン文書に含まれる日本人からの書簡の解明は、当時近代化を進めつつあった日本の有り様を明らかにするために、きわめて重要であり、日本の政治史・経済史・思想史など学際的な研究によって初めて可能なものとなろう。

これらの特徴は、この資料の所蔵が単に経済学研究だけでなく、社会科学研究を中心に関西学院大学全体にとってきわめて有効なものであるものと確信している。

最後にもっとも重要なことは、経済思想史はもちろん、広く社会科学の研究は、公刊された図書資料によってのみ行う段階を過ぎており、その世界的業績を上げようとすれば、公刊されていない草稿類・書簡類など一次資料を利用した研究を行う必要がある。これまで、関西学院大学図書館は、それら一次資料を、経済学者・統計学者・社会主義者などを対象に徐々に蓄積してきた。それら一次資料にもとづく研究の成果は少しずつではあるが、公表されつつある。しかし、その数は限られており、今回の資料群は、関西学院大学図書館を質と量の両面から格段に引き上げるものであり、この分野では、ロンドン大学やハーヴァード大学の図書館と同様、関西学院大学図書館を世界の図書館とするのに、大きく貢献するであろう。

【参考資料】数字は書簡数であるが、整理が終わっていないため現状では概数である。

Ashley,W.J.(18), Booth,C.(9), Bowley,A.L(21),
British Association(129), Cairnes,J.E.(1), Cunningham,W.(28),
Fisher,I.(18), Giffin,R.(41), Higgs,H.(641),
Marshall,M.P.(50:Marshall夫人), Jevons,H.(70:Jevons夫人),
Jevons,H.(10:息子), Laski,H.(1), Leslie,C.(16), Levi,L.(1),
London School of Economics(170), Palgrave,R.H.I.(99),
Scott,W.R.(405), Smart.W.(38), Toynbee,A.(17),
University College London(211), Webb,B.(15),
Wicksteed, P.H.(42)

【謝辞】本稿の執筆にあたって、以下の参考資料に加えて、丸善株式会社、とりわけ木村潤一郎氏より提供された多くの情報・ご教示に対して、記して厚くお礼申し上げます。

Keynes, J.M., *Essays in Biography,* chap.17, *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X, 1972（大野忠男訳『人物評伝』『ケインズ全集』第 10 巻、東洋経済新報社、1980）。

Freeman, R.D., “The R.D. Freeman Collection of Foxwell's Papers-Its Rescue”, *Journal of the History of Economic Thought*, vol.28, no.4, 2006, pp.489-95.

展示資料紹介：書簡

【Ⅰ】フォックスウェル宛ジェヴォンズ書簡：1879 年 11 月 14 日付

ジェヴォンズ（William Stanley Jevons, 1835-1882）

イギリスの経済学者、論理学者。メンガー（Carl Menger, 1840-1921）、ワルラス（Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910）とともに、近代経済学の体系的出発を画する限界革命を担ったトリオの一人であり、その主著『経済学の理論』*The Theory of Political Economy*（1871）は、生産費説にたつ古典派経済学を鋭く批判し、経済学を快楽・苦痛の微積分学と定義した。そのほか、当時イギリスの動力源だった石炭の早晩の枯渇を経済学の視点から予言してベストセラーになった『石炭問題』*The Coal Question*（1865）をはじめ、貨幣論、景気循環論（太陽黒点説でも有名）の優れた理論的・経験的研究や、論理学、科学方法論面での重要な業績を挙げるなど、多くの著書がある。

Cf. *Letters & Journal of W. Stanley Jevons*, ed. by his wife（Harriet A. Jevons）, pp.408-09. ここに部分的に収録された書簡の全文は、R.D. フリーマンの許可を得て *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*（ed., by R.D. Collison Black, vol.V, pp.79-81, Letter 631）に収録されている。

【Ⅱ】フォックスウェル宛ケインズ書簡：1918 年 12 月 17 日付

ケインズ（John Maynard Keynes, 1883-1946）

20 世紀を代表するイギリスの経済学者。1923 年から 25

年にかけてのイギリスの金本位制復帰問題に関しては、『貨幣改革論』*A Tract on Monetary Reform*（1923）を著し、金本位制に反対して管理通貨制を主張した。1925年、イギリスが金本位制に復帰して不況と失業にみまわれると、自由党の支持と改革を目的とした『自由放任の終焉』*The End of Laissez-Faire*（1926）などの一連のパンフレットを著した。ピグーとの論争のなかでマーシャル的な新古典派経済学への疑問を強め、1936年に主著『雇用・利子および貨幣の一般理論』*The General Theory of Employment, Interest and Money* を発表し、経済学史上「ケインズ革命」とよばれるほど、大きな影響を与えた。

【Ⅲ】フォックスウェル宛マーシャル書簡：1887年7月31日付

マーシャル（Alfred Marshall, 1842-1924）

イギリスの経済学者。1885年にケンブリッジ大学の経済学教授となり、多くの優れた弟子を養成して、古典学派の伝統を豊かに継承し、独自のケンブリッジ学派を創始した。90年の王立経済学会の設立や、その機関誌『エコノミック・ジャーナル』*Economic Journal* の発刊（1891）にも尽力した。主著『経済学原理』*Principles of Economics*（1890）によって、世界の経済学界で不動の地位を確立したが、同書以前に刊行された夫人と共著で最初の著作となる『産業経済学』*The Economics of Industry*（1879）も近年注目を集めている。マーシャルの経済学は、しばしば部分均衡理論として特徴づけられ、ワルラスの一般均衡理論と対比されることがある。

【Ⅳ】フォックスウェル宛アントン・メンガー書簡：1898年11月20日付

A. メンガー（Anton Menger, 1841-1906）

オーストリアの法学者。ウィーン大学総長。社会主義の法学的研究を行い、生存権・労働権の理論を樹立した。主著は『全労働収益権史論』*Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung*（1886）である。

【Ⅴ】フォックスウェル宛カール・メンガー書簡：1903年10月4日付

C. メンガー（Carl Menger, 1840-1921）

オーストリアの経済学者、オーストリア学派の創始者。ジェヴォンズ、ワルラスと並ぶ限界革命トリオの一人で、経済学上の主著が『国民経済学原理』*Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*（1871、第一部のみ刊行）である。

【Ⅵ】フォックスウェル宛シュンペーター書簡：1906年11月27日付

シュンペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950）

ケインズと並ぶ20世紀前半の代表的経済学者。計量経済学会創立者の一人。25歳のときに最初の著作『理論経済学の本質と主要内容』*Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*（1908）を著し、ついで4年後の著作『経済発展の理論』*Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*（1912）で一躍、世界的にその名を知られるようになった。1932年にハーヴァード大学に移籍し、生涯アメリカで生活した。

【Ⅶ】フォックスウェル宛L.ワルラス書簡：1882年2月1日付

ワルラス（Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910）

フランスの経済学者。ローザンヌ学派の創始者。1870年、ローザンヌ・アカデミーの教授に就任以降、着実に研究成果をあげた。1873年には「交換の数学的理論の原理」を発表して限界原理を確立し、ついで二商品交換の理論から多数商品交換の理論へ、またこれら商品が生産されたものであることに着目して、生産要素である土地用役、労働、資本用役の需給量と価格の決定を含む生産理論へ、さらに資本財の生産を扱う資本化の理論へと展開し、それらは『純粋経済学要論』*Éléments d'économie politique pure*（1874-77）へと結実した。

Cf. ワルラスは書簡を出すにあたり、多くは下書きし、清書したうえで投函した。その手元控え書簡は、*Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, ed. by W. Jaffé として出版されている。下書きと投函書簡との異同は今後の研究にとって重要であろう。

【Ⅷ】フォックスウェル宛アーネスト・フォックスウェル書簡：1898年3月24日付

アーネスト・フォックスウェル（Ernest Foxwell, 1851-1922）

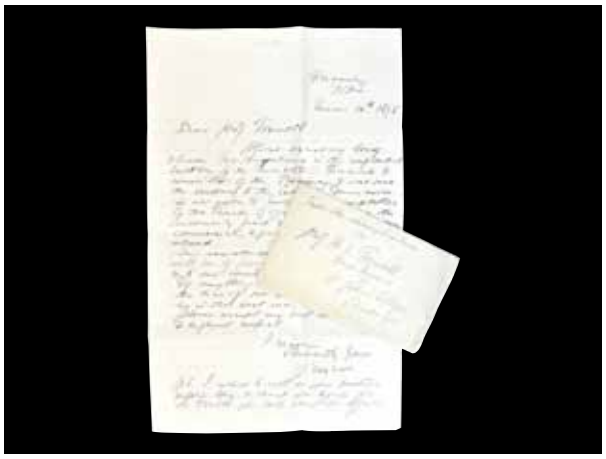
1851年アーネスト・フォックスウェルはフォックスウェルの弟として生まれ、初めは医学を学んだが、1874年ケンブリッジ大学で道徳学トライポスに合格し、1880年にはケンブリッジでM.A.を取得した。1896年から99年までお雇い外国人教師として東京帝国大学などで経済学を担当した。

（写真）アーネスト・フォックスウェル Ernest Foxwell 幼年期・成人期
関西学院大学図書館所蔵フォックスウェル文書より

【Ⅸ】フォックスウェル宛日本人書簡

1）添田寿一（1864-1929）1896 年 3 月 20 日付

明治時代後期・大正時代の経済官僚、銀行家。1884 年に大蔵省入りし、3 年間自費でイギリス、ドイツに留学。帰国後、銀行制度の確立に尽力した。日本興業銀行（現みずほ銀行、みずほコーポレート銀行）が新設されると初代総裁となる。のち、鉄道院総裁、中外商業新聞社・報知新聞社社長を歴任。労働者保護法の必要を説き、友愛会の顧問になるなど幅広く活動した。ジェヴォンズの主著を和訳した『論理新編』など、多方面にわたる著作を残した。



2）末松謙澄（1855-1920）1884 年 10 月 12 日付

明治・大正時代の官僚、政治家、文学者、法学者。1878 年イギリス駐在日本公使館の一等書記生見習となって渡欧、翌年ケンブリッジ大学に入学し文学・法学を学んだ。イギリス滞在中、世界ではじめて『源氏物語』を *Genji Monogatari : The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances* として英訳・出版した（17 帖のみの抄訳：London：Trübner, 1882）。晩年はローマ法研究に力を注ぎ、『ウルピアーヌス〈羅馬〉法範』など多くの学術文献を翻訳・刊行した。

井上　琢智（いのうえ　たくとし）

関西学院大学経済学部教授

専攻は経済思想史で、イギリス近代経済学史と日本の近代化、経済学導入史などの問題を扱っている。

主な著書・論文に『黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化』（日本評論社，2006）、『ジェヴォンズの思想と経済学―科学者から経済学者へ』（日本評論社、1987）、“Quetelet's influence on W.S.Jevons”, *Subjectivism and Objectivism in the History of Economic Thought*（ed. by Y. Ikeda & K.Yagi, pp.48-58, Routledge, 2012）、“The Week-long Blank in J.S.Mill's Sojourn in France：A Notebook Rediscovered”, *Notes and Queries*, vol.52, no.1, 2005. 主な編著に、*Economics in Meiji Japan : Collected Works of Western Origin*, Ⅰ - Ⅲ（Pickering & Chatto, 2009-11）、『幕末・明治初期邦訳経済学書』（ユーリカ・プレス，2006）、*W. Stanley Jevons : Collected Reviews and Obituaries*, 2 vols.（Thoemmes, 2002）、『近代経済学の開拓者』（翻訳:昭和堂，1986）、『マーシャルと同時代の経済学』（ミネルヴァ書房，1993）等がある。